俳諧蓑句集　全

俳句集　全

911.3
八

新城氏圖書印

東海道の一節も入さらゆ者れしはれなりとみし
とは今昌の妙言如前席にて篤田氏琴流
神路山末往袖振社の就而河東は松さは
音の句ねど浄瑠璃よと勧めて梓にちりば
めむと思ひて見出しさやすにかゝる刹ほと日記と
写さぬ事なれいとゝはちしくもとゞめたるはかり

時于明和壬辰中秋の日

酒斗坊にて 小子 筆誌

何日上暁音。京上寺一下寺
此後山 雁居山 綿竹 鷹巣山
新楽山 加無嶽 中乃子
今日も 一 冨山川 波 立ちぬ

明和辛卯の春しるし神戸明かるや
神路山下の人々社を祝し詠し給ふ信首の旅文庫
車なかて紀跡を啼き添ふ春の七日を旅ゆく

振ひ数 色に寒日 鳴き久さ

琴流

侍別の句くあつしり蛍ふきみて思ひ切あり尽く
旅の友とひ日別かれくの添しさとかい時の来日八句作り
まんしかい此し行く今日右に変り大木元人をとゝ

小しま堂 佐渡又信忠信の

鐘ふく流 仲より 行 初夜鐘
よし月の 持け雲

麗年地を 遠ふ 松乃 春久し

鶺鴒乃便りもとえん硯石

安慶硯石

八丁目なる山のやしろの下無川の石を八契色てくりつゝそ
錦織の日ふれとを旗摺織草まえぬれとは年ふきり
古田乃ころ年家ありれしく往来の旅人のよき入ぬ也
えぬ物なそ

菊掛乃彫て葉ちなむ　文政

地名す記して

二本松　松田の石乃菊摂ふむ

白川ち境の　内神てゝふて

代く久し国のさかれも　菊印末

奈須の里

和月咲おほ那の毎子乃太つち

下野の国　日光山は東を照て　神徳を仰ぐ遠境の人
まゝもの涼むいふかゝるついて立寿ぐ家族と拝まる

荘厳の結構短言なの庭をし

生茂る木のまや光る宮柱

林麻ある町に仮枕して翌日宇津の宮ある社に出た鏡谷の
沢を通る日は灌佛とて遠近すゝのちくく人立しけ天仍皆

皆人乃あまる茶こゝろや仏生会

千住の頭ふとり好物あるふ時の光陰と借し候ふは聞て

田舎も甘蘭　仮る初る日二ころ寺

某場月十日除りて江戸超一本中の名所て仮寝し折光の流
れ一村中の名所て時に代詞して立ぬ所と名の頭を
桐府筆下出て公宮き八景を眺望して

青嵐てぬれてすさ郎乃初鰹かれ

鎌倉の旧跡を見物若宮八幡ふまふて

涼風や由比の浜辺か　鶴ケ岡

江川しるの神前そ

蕣種と毎木の下　鳴や月日星

大山ち八冬山

秋涼し雲の中行夏木立

ところね

吉里の行ゑはしかいつれ涼みつる

三ノ尚

明始る寄と云しまや岩此窟

蝸ち溪と名身な窟へ我僧乃流譜の祖仏ヶ窩と呼この
乃道像弟石燈ある事かしなし知る人なし心と捨りく　翁

秋いさそ鴫ぞ風乃かんこ鳥

名におふ大井川の汁かつるに越わたりやの宿にて

川越して嬉し松中乃月見哉

十日ちの宿

芋あり婦まとこれ二荷や鳥換

遠見秋葉山へまゐりと迎て屯

暮る十軒人の手ひや秋葉る

いろの旧跡奈良朝臣の古墳有り

法の蛙露乃かきつばた

尾州名古屋へ旅めりて立寄候ぬ明眼院勅免の古写に

涼しさ世の明眼院乃池此月

一歩の情あそ仲秋望　伊勢に来る御師井面何某の
宅にて会しぬ次日端午を吉日として
両社に参詣　神前にこうし一あり

何草の露も常てあやめの日

二見の浦

短夜の月を二見の浦涼し

極楽へ十のてし

己酉の新やいろ庵の四極附

あさ日の峯迄へ立より高野を見てそこ
家路にもどらんと思ひければ大和路に出て又芳野へ
たち出て菊月十首かくの故郷吉野山へ入て

九条より ぬるむ嶽や 雲かゝる

悠々と旅乃 足よはや 夏木立

嵜戸寺

曼陀羅に 蓮折人や 図 雨

三輪

見るにはる 小手翳や 夏柳

立田

すゞしさや 新田の 山乃 若楓

多武峯

青々と 嵐も かはらぬ 檜原哉

よし野

あつさ日や 水にまぎるゝ 吉野葛

布引滝

布引の 滝の 汐音や 一柄 雨

すまにて

須磨明石 とるや 雲の 峯つゞき

高砂

高砂や 青田の 松も 常なれど

高砂月読聖は老たる家々の
としふりもそへられけり

高き見し 雨を水無瀬波

宮の仮森も故へ出て見その枝ふりて

素人で 蚕も 餘り ありきふ 仏に 祇

同廿日鉾ニ乗京為三条ゟ池田橋京ニとめらしれ
清水へ参り月せし途く

涼風や流の音羽の木の間より

舞台の日に

いけのつらき雲に出るむ蓮の南

祇園祭

祇堂会や河原ての雪神楽

松ニ山

秋ちりき雲のたえてや男山

[illegible]

名ま葉る松梅院乃えんみ

四条の涼は国を[illegible]

[illegible]

座ツ読の夕人仕見敷おみて盛す以を

唯ひとり何守須すゞみ南

光縁のやしろより加茂へ出向せしれる

夕立や加茂へ潜出に出お船川

月見しき続ニ遊び日数かさなり夜もらや[illegible]

[illegible]

鞍馬山

涼帳に紐た稿つる梅ニ月

去年の旅の秋人を稀れて幸時のめかりそ道途

奥きをの松まつく地ら本

[illegible]の義仲ると寺[illegible]の庵の古墳

咲散し塚の雲や草た露

いつまでも[illegible]

父母の命[illegible]

乃やかて旧里の　君公の御館のなまを祝ひまつりて

たけの名をとけ路乃初穂かな

多賀北神社

此社と瀧表乃つゝみ華柳哉

木曽の谷川を見て月、七夕たまひ

七夕や紫積舟手硯の相

盆六ハ上乃上彩町とよ所ゟして

鬼灯も笠の上たまし竹の華

急角して冬月十六日又江都に出ゐ向沢町西尾河某ゟ古雄とかありしに慈のおそ前にすみ父母のおもひをこゝに慈対乃句めれとも思ひて

すみた川の辺をいさよひけるに

秋借りて人乃華火のたかみ哉

咲るをこゝろけて

此寺乃時待ゆかり京北秋

木母寺一見

木母ちや江戸気吹扱秋の風

江武府邸

逝水の月先へ暮て旅乃日記

むさし野の名残もおしむこゝろありしも父母のあるなとして東くもおもひやまりをわつらひて上野の花に又まんまる我御しまんへの月をまんなおしめるに時雨の出を謝し立おまつりハつきもゐなく心の宿中いよいよ立去らん此月も旅の空にておもひをいまた月の日に仙台の細路に宿双親のおもひ親族のおもてそなたを忘れて今もむりにかへりて来のこと向へは

草に出ゝ月に秋見る都路哉

琴流
伊勢の下向道を語り
菰縄波の涼しさや
月乃あかりは余所と
して葉月中の八日家
路に帰りぬと給ふ
あるものの嬉しさ
いひくさ那くる

買琴
庵海日記の趣くてすへ秋月　琴流
五穀との野馬とり秋秋　蒲英
大寒は人乃心もよく治まりて　竹
みてなき落さ過去川の也　流
六月桜ハいつくの年乃雪　前
名のあることをしらみ見ゆる　竹
日酒飲む人もあかくなれるは　庵流
芒の葉かな手まね丸札　竹
別遠つて北野の和く露雲

ウ

読の音もおこへにかれ　流
源而氣質に吉山紀妻の弘く華　琴
弓矢とる身ハ乃豆もすと紀　流
日乃中の竜ヨ浪ら身此宮　琴
反り捨言く色うへ姫松　流
宮ちとの事も無心を云ふさ　琴
積まゐかせる玄實乃留主　流
尻るくさ名竹末や萬の岩　琴
者のうへも出りま　習ハん　歌

十三

さる人の喧嘩を仕組ニ乃替を　流
貴く中も江戸の多く　琴
材木の俵のうへも　僕せよく　流
好菜とをしの　濃め遅　琴
菰簾
こもだれし狐草と若き人倚て　流
ふぼんお事と　知ぬ　唐　琴
を知ハ本ハ歳月ものおもけ　流
是とハ何とも玉乃御　琴
猫鳴蝶とてう川のうき思ひ　流

ウ

虚無所にして手向ある利　琴
御寄進して西相生じ於の尺　流
音曲の労の者いとくせて　琴
僧ひとり業山家に念して二宗院　流
君留無事のはた人も参禅　琴
俗所出し籠の魚と嘯覚て　流
宗まく信用のうしやまふ嶋つ　琴
詩算は初紫かられハ住古起　前
而さく曲ともし山紀に旬　流

W

國學[illegible]室 短大
第6642號 受入
昭36. 3. 14